

一八五七年恐慌（七）

三宅義夫

一九

一八五七年十一月十五日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「恐慌はこんどはいくぶん独特な (etwas eigen-tümlich) 発展をしている。フランスとドイツでの株式 *Schwindel* はもうほとんど一年このかた先駆的恐慌 (vorläufige Krisis) の状態にあったが、いまやっとニューヨークにおける本元の株式 *Schwindel* (*Hauptaktienschwindel*) が崩壊となり、それによってすべてに決着がつくこととなったのだ。もっとも注目に値することは、ヤンキーはいつものように外国の資本で *Schwindel* をやったが、しかしこんどはとくに「ヨーロッパ」大陸の資本でやったことだ。アメリカのものでさえあればそれだけでも買集めていたドイツの官僚や利子生活者たちは、みごとに出血をしたにちがいないだろう。大陸での株式 *Schwindel* が先駆的恐慌 (*Vorkrisis*) をもったので、また大陸での株式 *Schwindel* とアメリカでの株式 *Schwindel* との直接の接触点はわずかであるので、アメリカの *Schwindel* の出来事が大陸のそれのうえにただちに破壊的な反作用を与えるのが遅れているが、しかしそれはまもなくやってくるだろう。――投機は株式以外にもいっさいの原材料ならびに植民地商品をとらえていたのであり、したがってまた、原材料の価格がそれらの商品の価格のなかで大きな地位を占めているような製造品はすべて投機に捲込まれていた。

……絹については当地では八月以来先駆的恐慌となっており、約二十の工場主が破産した——僕の見積りだとその「債務」額は二十万ポンドを下らないものであり、そのうちもっともよくしても三五〇四〇パーセントしか取れないだろう——。……絹恐慌 (Seidenkrisis) はまだ進行している。Bennoch, Twentyman & Rigg [silk dealers and manufacturers; Evans; op. cit., p. 52] の破産は、コベントリーで五人の絹リボンの工場主を窮地におとし入れており、これら工場主の「債務」額は十万ポンドにのぼり、うち最大は四万ポンド、最小は六千ポンドだ。そのうえダービーの T. C. Reed & Co. ——大きな絹紡業者、二重織業者、および工場主であるところの——が Bennoch のすぐあとに、かつその結果として、破産した。グラスゴーでは新聞にのった三十社以外に、なお多数の中小業者が倒れた——どれもそれについて尋ねたり話したりしていないが——。……棉花市場が今年どんなふうであったかは、当地の仲買人の公表報告書から僕がつくった同封の図表を見るとわかるだろう。……工業生産自体についていうと、アメリカでの過大な在庫品はおもに西部にあるらしく、東部の諸港での製品の在庫品は、僕のえたすべての報道によると、非常にすくない。だがそれらもまたすでに売れない商品であるということは、ニューヨークからリバプールへ積荷全部が返送されていることがこれを証明している。当地では紡績業者 (Spinner) の四分の三がただ在庫品を増すために働いており、せいぜい四分の一だけが若干の有効な契約をまだもっているにすぎない。労働時間の短縮 (short time) はほとんどまったく一般的だ。当地の非常に活動的な某紡糸問屋は、三週間前にはまだ四万五千ポンドの契約をもっていたが、現在では三千ポンドしかない。だから時間短縮でやっても、紡績業者はたちまち製品を引渡してしまうことができる。——マドラスとボンベイからのめずらしい好報 (一八四七年以来見られなかったような利益のある販売) によって、インド貿易は活気づいている。……疑いなく、数百の紡績業者や織布業者が向うへ委

託販売のために荷送りしている。したがってかの地では……貯蔵品恐慌 (Reservekrise) が準備されている。……

／ 当地の取引所の一般的光景は前週きわめておもしろかった。連中は僕が突然みなとちがつて上機嫌になっているのをかんかん怒っている。じっさい取引所は、僕のいまの気だるさを軽快な、浮き浮きした気持ちに変えさせる唯一の場所である。そのうえ僕はもちろんいつも悲觀的な予言をしているので、それが馬鹿どもを二重に怒らせている。木曜日には状態は悲惨をきわめた。金曜日には御連中は銀行条例停止の可能な効果についてあれこれ思いをめぐらした。そして棉花が一ペンス戻して上ったので、最悪の事態はすぎ去ったといっていた。だが昨日のうちにまたきわめて喜ばしい意気消沈がやってきた。つまり、栄光はすべてまったくの空語であったのであり、ほとんどだれ一人として買おうとしなかったのが、当地の市場は前同様にいぜんとして悪いままだったのだ〔木曜日というのは十一月十二日のイングランド銀行条例が停止された日であり、この手紙は金、土を経て日曜日に書かれている〕。／ この恐慌に輝かしい発展を約束しているものは、最初の衝撃のさいにただちに銀行条例を停止する必要があったことだ (Was dieser Krisis eine glänzende Entwicklung verspricht, ist die sofortige Notwendigkeit der Bankaktsuspension beim ersten Stog)。これによって〔イングランド〕銀行自身が直接に捲込まれている。一八四七年にはまだ、事態を一八四五年からぐずぐずさせてきて、ぎりぎり最後の最悪の瞬間にこの措置をとるといったことが可能だったのだ。／ 恐慌の拡大と持続にたいしても配慮されている〔状況から見て拡大、持続がたしかだ、の意〕。大部分の絹織工 (手織機) からすでにパンを奪った絹恐慌および労働時間短縮だけでも、国内商業を冬中完全に駄目にしてしまうに十分だ、――十月の末まではそれ〔国内商業〕はまだよかったのだが。アメリカの恐慌は、バルムやエルベルフェルトの小間物製造業者、エルベルフェルト、クレーフェルト、リヨンの絹製造業者、ドイツ、フランス、ベルギーの布製造業者、な

どを深く窮地におとし入れている。バルムの小間物製造業者はなおことに、Bennoch, Twentyman〔前出〕のために困っている。Draper, Pietroni & Co. [Mediterranean trade. Evans; op. cit., p. 52] はイタリー、ことにメイランド、公国、ボログナ、等々を窮地におとし入れている。——棉花が磅当り六ペンスにならなければ、当地の木綿工業は一時的な立直りもまったく可能でない。そして現在まだ七ないし七 $\frac{1}{4}$ ペンスだ。このことから君は、当地では事態が転換の可能性にもほとんどいたっていないことがわかるだろう。だがしかし春には一時的な転換が可能、というよりおそらくそうなりそうだ (Trotzdem ist im Frühjahr eine momentane Wendung möglich und sogar wahrscheinlich)。『好況 (gutes Geschäft) 』への転換というわけではないが、商売がふたたびやってゆけるような転換だ。したがって商業機構は動きをつづけてゆき、錆びついてしまわないだろう。これまで恐慌がこんなに急速にかつ一撃で終ってしまったためしはない。そして十年間の繁栄と Schwindel とのあとを受けた今度の恐慌は、もっともそんなことになるにふさわしくない。そのうえ、助けとなるべきあたらしいオーストラリアやカリフォルニアももうこれ以上ないし、またシナは二十年このかた泥沼のなかにある。こんどの最初の打撃 (erster Schlag) の強烈さも、事態がどんなに大きな広がりをとるかを示している。ばく大な金生産と産業のこれに照応する大きな拡大とのあとを受けたのであるから、これ以外の進み方をすることはできないのだ。——まずこの『回復 (Besserung) 』が慢性的な恐慌に入り、それから二度目のそして決定的な主要打撃 (ein zweiter und entscheidender Hauptschlag) がやってくるのが望ましいだろう。人々を激させるには、慢性的な不況 (Druck) がしばらくの間つづくことが必要だ。プロレタリアートはそうしたとき、より具合よく、事態をより十分に理解し、より一致して、打ちかかるだろう。ちょうど騎兵襲撃が、馬がまず五百歩ほど駈けてそれから敵にたいする疾駆距離に入らねばならなかったばあい

に、ずっと具合よく行なわれるようなものだ。僕は、全ヨーロッパが完全に捲込まれてしまう以前にあまり早くなくながおこることは望まない。戦いはそうなったときよりはげしく、より長々と、またよりいっそうあちらこちらで大波をうって、行なわれるだろう。五月や六月ではまだまだ早すぎるだろう (Mai oder Juni wäre fast noch zu früh)。大衆は長い繁栄によっておそろしく嗜眠性になってしまっているにちがいない。……／君が恐慌について材料を集めているのは大へんけっこうだ (一八五七年十一月十三日付マルクスからエンゲルスへの手紙、本誌第十三卷第三号、一三九ページ参照)。今日またガーディアン紙を二つ送る。同紙を規則的に、またエキザミナーとタイムズをとくとき送ろう。またできるだけ頻繁に、僕が知ったこと全部をお知らせしよう、——それによってわれわれは事実のいいストックをもつことになる。／それはそうと、僕の気分は君と同様だ。Schwindel がニューヨークで崩壊して以来、僕はジャーシー (エンゲルスが健康を害して転地していた地) にいても、もうすこしも落着かなかった。そしてこの一般的な崩壊によって非常に陽気になっている。過去七年間のブルジョアの汚物が僕にもやはりいくぶんくつついていたが、いまやそれらは洗ひ清められ、僕はふたたび別人のようになってゐる。恐慌は僕にとって肉体的に海水浴と同じような作用をするのだろう、——現在すでにそれが認められる。一八四八年にわれわれはいった、いまやわれわれの時代が来たと。そしてそれはある意味では来た。だがこんどはそれは完全にやってくる。いまやそれはいのちにかかわるのだ (jetzt geht es um den Kopf)。僕の軍事研究はこのためただちにより役に立つようになる。時を移さず、プロシャ、オーストリー、バイエルン、フランスの軍隊の現在の組織と基本戦術について、そして加えて騎馬、すなわち狐貍——これが乗馬の本当の練習だ——だけに、専心したい」。

右はエンゲルスが十一月はじめに保養先からマンチェスターに帰り、そこで恐慌の様子をまのあたりに見て、十一

月十二日のイングラント銀行条例停止のあった三日後の十五日日曜日に、ひさびさにマルクス宛に書いた長い手紙である。エンゲルスは右で「できるだけ頻繁に、僕が知ったこと全部をお知らせしよう」といつているように、このあとマルクスにあてて後掲のように恐慌の経過についていろいろ書送っている。なお、右のなかで「当地の仲買人の公表報告書から僕がつくった同封の図表」云々といっているが、「同封」を忘れたらしく追いかけて翌十六日付でこれを送っている、——「昨日忘れた図表を同封する」（十一月十六日付エンゲルスからマルクスへの手紙）。この「図表」は「一八五七年一月一日以来のオルレアンの棉花中等品の価格の足どり」とするされ、『往復書簡集』にそのまま収められているが、これによると、はじまりの点の一月九日には七ペンス $\frac{3}{4}$ 、それが六月ごろからやや上昇線を取り、八月、九月に大幅に上がって十月九日には九ペンス $\frac{3}{8}$ までになっているが、これを頂点として以後下落をつづけ、十一月六日八ペンス $\frac{1}{16}$ 、それが（記載日は毎日でない）十一月十二日には六ペンス $\frac{1}{8}$ にまで急落している。そして「Western Bank of Scotland がその在庫品を値段を構わずに処分させた十一月十二日に最低値となった（同行は既述のように十一月九日に支払停止をした）。十一月十三日はほぼ七ペンスであったが、仲買人は以後相場を唱えていない（このことについては右の手紙のなかでもしるされている）」と付記している。

「ウィーンで約四週間前に株式の瓦解（crash）があった。この機会にかの地の一〇五の商会が一千四百万フロリン、または百四十万ポンド（債務額）をもって破産するはずだ」（十一月十七日付エンゲルスからマルクスへの手紙）。

一八五七年十一月二十四日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「ロンドンにおける貨幣パニック（monetary panic）はここ数日いくぶん落着いた。だが間もなくあらたにはじまるだろう。それにはなかんづく、イギリスからフランスへの貨幣輸出（Geldexport, こゝは Goldexport と同義）を調整するために一人のフランスの銀行重役と一緒に

当地に到着したフッド (Fould) が貢献することだろう。もちろん、イングランド銀行条例の停止自身は、同条例が
つくり出した人為的な余計な部分を取り除いたかぎりにおいてだけは、効力を及ぼすことができた。銀行部は、公私の
預金が一千七百万「ポンド」以上あるのに準備金が四十万—五十万ポンドしかなかったのだから、つぎの日に破産を
宣言しなければならなかっただろう。他方において、この危険は、発券部における金属準備は発行銀行券の三分の一
よりずっとすくないといったものではなかったから、純粹に条例自身によってつくり出されたものだった。「ここでマ
ルクスが挙げている計数については、本誌第十三卷第三号一三六—七ページで見えておいた十一月十二日のイングランド銀行の計数を
参照されたい。それによると、当日の銀行部準備額——銀行部保有銀行券プラス鑄貨——は五八一千ポンドであった。また発券部プ
リオンは六、五二四千ポンド、これにたいして発行銀行券はこの額プラス無準備発行額の限度一四、四七五千ポンド、つまり約二一、
〇〇千ポンド、したがって発行銀行券は金属準備の約三・二倍であったことになる」。条例は貨幣パニックの勃発を促進し、
そしてそれによっておそらくこの勃発のはげしさを減じた「ここは Beschleunigt hat der Akt den Ausbruch der money
panic und ihn dadurch vielleicht weniger intensiv gemacht となっているが、この weniger を mehr とし、この勃発をよりはげ
しくさせた、といった方が適當ではなからうかとも考えられる」。この間他方、イングランド銀行が（一流証券にたいして）
一〇パーセントという極限で「zum Maximum von 10%。ただし、レートとしては Maximum とはいえる高いものであるが、一
〇パーセント自身は条例停止期間これ以下では貸出さないこととされたレートであった」貸出をつけていることは「das Pumpen
der Bank」、多数の取引の進行を保つであらう。だがそれらの取引もけっきょくはあらたな破局に向ってゆくのであ
る。たとえば穀物や砂糖、等々は現在、それらの所有者たちがそれら商品を売却するかわりに、それら商品にたいし
て彼らにあてて振出された手形を割引に付すことによって、価格がまだ保たれている（Z. B. das Korn, Zucker etc.

werden jetzt noch im Preise gehalten dadurch, daß ihre owners die für dieselben auf sie gezogenen Wechsel diskontieren, statt die waren zu verkaufen. いうまでもなくこれはおかしいが、マルクスのこの思いがけいについては、エンゲルスが次掲の手紙で書いている」。僕はこれらの価格の下落は不可避免的だと思うので、これらの連中はただひどい破産を用意しているのだと信じている。それがちょうど一八四七年五月のばあいだった（一八四七年には四月パニックのさい諸商社は四、五月の危機を在庫品や所有有価証券の処分売りで切り抜けたが、そのあと十月のとき——しかし一八四七年のときイングラント銀行条例が停止されたのはこのときであった——空前の破産が生じた」。ロンドンで——以前の恐慌とちがって——いわゆる貨幣市場をまだいくぶん保っているものは、株式銀行だ。これはもともとやっと最近十年間に発達したものであって、これらは俗物どもや小金利生活者等々に、イングラント銀行の公定利子率よりも一パーセントすくない利子を支払っている。九パーセントの誘惑はあまりに大きいので、これにたいするまじめな抵抗は見出されない（預金の利子があまり高いので、銀行の支払停止を懸念して預金を引出すといったことが見受けられない、という意味であろうか）。かくて現在シティの奴等（Gitygesindel）は以前のいっより以上に、俗物どもの小資本を自由に行っている。これらの銀行のうちのただ一つでもいままし倒れたなら、叫喚の声は一般的になるだろう。だからロイヤル・ブリティッシュ・バンクがあまり早く爆発してしまったことは、非常に残念なことだった（既述のように——本誌第十二巻第二号五四八ページ——同行は乱脈な経営をさらけ出して一八五六年九月に破産をした）。／アメリカでは、恐慌の結果保護関税論者が元気づいてくることはほとんど確実なようだ。このことはイギリスの御連中にとって長くつづく苦境をもたらすだろう。／……君は手紙のなかで（「上掲の十一月十五日付の手紙」、工場主たちは棉花が六ペンスにならなければ進んでゆけないと書いている。だが、大きな生産制限は棉花価格を必然的にまもなくこの点にまで押し下げるのではないだろうか？」）

(1) なお、このあとのところでマルクスは、ジョーンスが当時とっていたやり方について批判し、「ジョーンスはきわめてへまな役割を演じている。……真のアジテーションをするために恐慌を利用しないで、ブルジョアとの協力を説教することによって労働者を抑えつけているが、他方このブルジョアから信頼の念をすこしもかちえていない。……彼には長いこと会っていないが、こんどは訪ねてみようと思う。……このとんまはまず一つの党をつくり上げるべきであって、そのためには工場地帯に入ることが必要なのだ。そうすれば、急進的なブルジョアは彼のところに妥協しにやってくるだろう」と述べている。

一八五七年十二月七日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「価格の不断のぐらつきと堆積しつつある在庫品とを伴っている恐慌のために、前週は多くのつまらない書きものをしなければならなかった。それで君にガーディアンを送ることができただけで、手紙は書けなかった。／君の先日の手紙のなかに一つの小さな誤り (ein slight mistake) がある。君は『穀物や砂糖、等々は現在、その所有者たちがそれら商品を売却するかわりに、それら商品にたいして彼らにあてて振出された手形を割引に付すことによって、価格がまだ保たれている』と書いている。彼らは手形支払人として、手形を割引に付すことはできない。彼らは手形を引受け、そして満期のさいに支払うこと以外には、手形となんの関係もない。商品の所有者たちは、商品を担保とする前貸を受けることによってのみ、強制売却から救われうる。いまの事情のもとではこれはなかなかむずかしい。ともかく、こうした前貸の額は商品価格の暴落(砂糖では三五パーセント)につれて低下しており、そしてただ若干の強制売却がやむなくなされるだけで、ただちに諸商品はなおいっそう下落するだろうことはたしかだ。だから所有者たちは以前にはより高い価値の三分の二あるいは四分の三の前貸を受けていたのが、現在では下がった価値のせいぜい二分の一しか手に入れていない。つまり以前に入手していた前貸の約半額である。このことは事態をまもなく爆発に導くにちがいない。だが、マインシング・レイン〔ロンドンの街名、ここにはコーヒー、茶の取引所がある〕やマーク・レイン〔同上、ここには穀物の取引所がある〕の

商売がなおしばらくの間緩慢な下落をつづけていて、それからやっと若干の大きな破産がそこにやってくる、といったこともまたありうる。これがリバプールやその他の港における破産と同様にやってくることは、たしかだ。砂糖、コーヒー、棉花、羊毛、皮革、染料、絹、等々における損失は莫大なものである。一八五七年の棉花の収穫を三百万捆と仮定すると（それは三百二十五万捆になるだろう）、この全量は現在、九月よりも一千五百万ポンド価値が減じている。当地のある商社は三万五千袋のコーヒーをだめにしたが、一袋について一ポンドの損失になる。東インド棉花の損失も同じように大きい、——三三パーセント。これらの商品にたいして振出された手形が満期になるにつれて、破産もまたやってくるにちがいない。／さきごろイングランド銀行と二日間商議して同行から百万ポンドの前貸を受け、それによって救われた大きなアメリカ商社は、七月四日記念「アメリカ独立宣言記念」晩餐会の男、Peabody氏⁽²⁾だった。Suse & Sibeth は Frühling & Götschen を除けば、東インドで一八四七年以後その手形が商品の積荷証券の保証なしで譲渡された唯一の商会だが、このゆるぎない商会さえ、最近「イングランド」銀行に助けを懇願することを余儀なくされたという噂さだ。この Suse & Sibeth は非常な吝嗇漢であり、また、すこしも危険をおかさないためには、できればまったく商売をしない方を選ぶというほど臆病なのだ。／当地の様子は相変らず以前と同様だ。八日か十日ほど前、突然インドおよび近東の買手が市場にやってきて、きわめて安い価格で必要品を仕入れたので、棉花や糸や生地在庫品を抱えてひどく困っていた製造業者の若干がひどい困窮から救われた。火曜日（十一月四日⁽³⁾）以来はふたたび万事しずかだ。コストはひきつづき製造業者にとって有利に推移している、——石炭、塗油、等々は操業短縮をしても完全操業をしてもまったく同じであるが、賃銀だけは三分の一ないし半分ほど減っている。だがなにも売れていなく、大ていのわれわれ紡績業者および製造業者は流動資本（Floating capital）

が非常に乏しいので、多くの者はぜんぜんぶらぶらしている。この数日間に入つないし九つの小さいのがすでに倒れた。しかしこれはただ、恐慌がこの層に及んだ最初の徴候であるにすぎない。今日僕が聞いたところによると、オックスフォード街に広大な工場（オックスフォード街燃糸商会 Oxford Road Twist Comp.）を持っている Cookes がその猟犬、フォックスハウンドやグレイハウンド（いずれも猟犬の種名）、等々を売ったということだ。またある者はその雇人を解雇し、その豪勢な邸宅を賃貸するために引移ったということだ。彼らはまだ破産はしていないが、しかしまもなく碎け散ってしまうことだろう。あと二週間、そうすると騒動が当地で完全におきるだろう。（Noch vierzehn Tage, und der Tanz ist hier vollständig im Gang）。／ Sewells und Necks（スウェーデン貿易に携わっていた商会）の支払停止によって、ノルウェーはひどくひき込まれている。⁽⁴⁾従来そこはまだ襲われたことがなかったのだが。／ハンブルグでは大規模な光景を呈している。⁽⁵⁾Ullberg und Cramer（一千二百万バンコマルクの債務をもって破産したスウェーデン人——このうち七百万は彼ら宛の手形だった！）は三十万マルク以上ではない資本しか持っていなかった?! 一群の連中が、ただ、期日の来たただの一枚の手形にたいしてもぜんぜん現金を調達することができず、そしてまたおそらくその百倍もの額の保有手形が現在無価値となつてしまつてゐるということによって、窮地におとされている。こんにちのハンブルグにおけるほど、パニックが完全かつ模範的であつたことはいまだかつてなかった。いっさいが価値を失い、銀と金以外のものは絶対的に無価値なのだ（So komplett und klassisch ist noch nie eine Panic gewesen wie jetzt in Hamburg. Alles ist wertlos, absolut wertlos außer Silber und Gold）。非常に古い富豪 Christian Mathias Schröder も前週破産した。ロンドンの J. H. Schröder（右の兄弟）が電報を打って、二百万マルク・バンコで足りるのなら、それだけ銀を送つてもよいとい

てやった。だがその答は、三百万か、そうでなければないということだった。彼〔ロントンの Schröder〕は三百万を手離すことはできなかったのであって、そして Christian Matthias は碎け散ったのであった。われわれはハンブルグに債務をもっているが、それらがまだ存在しているのか、つぶれてしまっているのか、まったくわからない。ハンブルグでの全出来事は、いまだ見たことのないようなきわめて大規模な空手形の使用 (Wechselreitei) にもとづいている。ハンブルグ、ロンドン、ユペンハーゲン、およびストックホルムの間で、これはきわめて狂気の沙汰に行なわれていた。アメリカでの崩壊および生産物の下落とともに、それによって全出来事が白日のもとにさらけ出され、そして現在ハンブルグは商業上破滅してしまっている。ドイツの、とくにベルリン、ザクセン、シュレージエンの、産業家たちは、これによってまたもひどく心をしめつけられている。／棉花は現在中等品で六ペン^{9/16}だが、まもなく六ペンになるだろう。だが当地の製造業者がふたたび時間一ぱい作業ができるのは、そのため彼らの生産が増大することによって〔棉花にたいする需要が増大して〕価格がふたたび六ペン以上に騰貴しないようになってからのことだ。だがいまやすぐにそうなるだろう。／当地の俗人たちの間では、恐慌が飲酒のうえに強い影響を及ぼしている。だれだってひとり家に家族とともにいて心配に耐えていることはできないので、クラブは景気がよく、酒の消費は非常に増加している。人は深みに落ち込めば落ち込むほど、無理に気を晴らそうと努めるものだ。そして翌朝、彼は道徳的かつ生理的宿酔のもっとも適切な例となるのだ」。

(2) "In the depth of the crisis, about the middle of November, a report became current that the affairs of a large American firm were in a critical position. For some days the rumour spread, but it could not be traced to any positive source. It then turned out that the wealthy house of Messrs. George Peabody and Co., the American bankers

and merchants, had been compelled to apply to the Bank of England for assistance, and it was not until considerable negotiation had taken place that the arrangements were concluded. These were effected on the security of Mr. George Peabody's private property, and the capital of the firm, backed by the guarantees of several of the metropolitan joint-stock banks. The amount advanced was speedily repaid, and it was eventually stated that the total sacrifice sustained was only equal to about one year's profit. (Evans ; op. cit., p. 49)

(3) この()のところに、『往復書簡集』インスティットゥート版編集者は「マルクスの書き加えたもの」という註を付しているが、一八五七年の十一月四日は水曜日であつて火曜日ではないし、また十一月四日はとくに劃期的な出来事があつた日でもない。いまこの手紙が書かれている十二月七日は計算してみると月曜日であるから、この火曜日は前週の火曜日と見るのが普通ではなからうかと思われる。前週の火曜日は十二月一日で、六日前に当る。そして右のすぐ前で「八日か十日ほど前」云々といつてゐるエンゲルスの行文としては、八日か十日ほど前にそういうことがおこつたがそのあとたびたびしづかだ、といったところではなかつたかと思われる。そうするとこの「十一月四日」という書入れはなんのことだかわからないことになるが——。なおマルクスがこの前にエンゲルスに出した手紙の日付の十一月二十四日は前々週の火曜日であるが、それとは関係がないであらう。どちらにしても大した事柄ではないが、手紙の読み方として一言。

(4) 一八五七年十二月に入つて、スウェーデン貿易に携わつてゐた諸商会の支払停止が生じた——五日に Sewells and Neck, 七日に Albert Pelly and Co., また十四日に Rew, Prescott and Co.——(Evans ; op. cit., p. 47, 53, 56~7)。

(5) 「北歐諸国は特殊なはげしさで恐慌に見舞われた。先立つ数年間、スカンジナビアの二王国はその貿易をいちじるしい程度に、かつ一般に借入資本を用いることによって、増大させた。あるばあいには、イギリスの商人たちがスカンジナビア人に長期の信用で商品を売った。また他のばあいには、ハンブルクの商社がスウェーデン、デンマーク、ノルウェーに在る取引先のために手形を引受けた——かくしてこれらスウェーデン、デンマーク、ノルウェーの商社は、ハンブルクのクレディットによつて買入れていたわけであつた。……アメリカでの爆発とともに、報いを受ける日がやつて来た。……ハンブルグは打撃をもつともひどく受けた。……商人たちはきわめて絶望的な状態におち入った。まもなく割引は不可能となり、そして為替手形——ずつと昔から大きな商取引での流通用具であつたところの——は人々の間でその価値を完全に失つてしまつたので、硬貨の銀での支払だけが適法とみなされた」(Evans ; op. cit., p. 38~9)。なお、ヨーロッパ大陸の大きな貿易中心地であり、北ヨーロッパ

最大の手形市場であつたこのハンブルクの恐慌については“Report,” No. 56, op. cit., p. 82~3, また Hans Rosenberg ; a. a. O. S. 128~30 参照。

一八五七年十二月八日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「僕が君に先日の手紙を階上で書いていたとき、妻は階下で、口々に『不景氣(heavy times)』を口実にして、金を奪い取ろうとする貧慾な狼どもに囲まれていた。……こうした事情で僕はやや混乱しながら書いていた。……だが君が笑うべきしくじりを『小さな誤り』と和らげてくれるだろうとまでは、ほとんど予期できなかった。御好意どうもありがとう『前掲の手紙での、マルクスの思いちがいについてのエンゲルスの指摘のこと』。／＼さて事柄自体についてであるが、マインシング街およびマーク街の連中は『エコノミスト』によると、たしかにふたたび「イングランド銀行条例の停止後ふたたびということであろうか」彼らの商品を担保として貸付を受けていたが、しかしこの手も前の水曜日あたりからはやれなくなった。小麦はとくに二、三日間上昇傾向さえとっていたが、しかしそれ(厳密にいえば小麦粉)は、小麦および小麦粉の輸出を自由にしたフランスの訓令のために、とくに昨日はバルチック海地方での小麦価格の崩落のために、二八〇封度当り三シリング下落した。(注意。ボナバルトの措置はフランスにおいて一時的な効果しかもたなかった。価格はフランスでわずかばかり上昇したが、しかしこの上昇によってただちに、従来フランスの市場にまだ投げ出されていなかった供給の増加が生じた)。若干の小麦商が当地で破産した。だがこのほかに、小さな商店や小麦の先物取引だけをする商人がある。大量のアメリカの船荷が春には着くし、フランス人はかの地の逼迫がもっと深刻になるばあいには、小麦でイギリスを価格を構わずに攻撃するだろう。僕の考えでは——旧来のきまりどおりにいま二、三回の豊作がこれにつづくと「不作と豊作との旧来の循環どおりに、という意であろう」——穀物条例撤廃の地主および小作人にたいする効果はいまはじめてイギリスにおいて作

用を及ぼし、かつての農業の窮境がきわめてみごとにくり返されるだろう。工業の繁栄の結果として国内商業が好況であり、また多年不作であったため、一八四七〜一八五七年には「条例撤廃の」実験がうまく行なわれえなかったものであって、条例撤廃が死文となつてしまつていた〔前掲の『トリビュン』一八五七年十一月三十日号論説のなかで、自由主義主張者の宣伝とちがつて、「工業は高い穀物価格にもかかわらず未曾有の規模に達したのに、他方では、現在、工業は豊饒な収穫のもとで前代未聞の崩壊に見舞われている」という現実が現われていると指摘していたことを想起されたい。〕／……〔ここで前掲の『トリビュン』で僕は一つの満足を味わつた〕云々ということを告げている。——本誌第十三卷第三号一五〇〜一ページの註(17)参照〕……そのうえ、ロイド・オーヴァストーンが一八四四年の条例を熱狂的に支持してゐた眞の理由がいまや現われてきたことは、おもしろい、——というのは、この条例は『冷酷な計算者』『貸付資本家』にたいして、商業界から二〇〜三〇パーセントを「利子として」締め上げてとることを許すからである。／『労働の権利』に非常に反対を叫んでいる資本家たちが、いまやいたるところで政府に『国家の援助』を求め、かくしてハンブルグ、ベルリン、ストックホルム、コペンハーゲンにおいて、またイギリスでさえも「インクランド銀行」条例の停止という形において、一般的出費(利子負担を指すのであらう)にたいして『利潤の権利』を主張しているということは、おみごとなことだ。同様にまた、ハンブルグの偏狭固陋な連中(Spießbürger)が、資本家たちにこれ以上の施しを与えることを拒んだことも、おみごとなことだ〔このハンブルグの件についてはのちの註(8)を見られたい〕。／事の全経過において奇妙なことは(Befremdende)、フランスでの事態およびそれについてのイギリスの大多数の新聞の取扱ひ方である。アメリカの崩壊後、ジョン・ブルが冷静な、落付いた商人として、兄弟ジョナサン「アメリカ人」と対比されたが、いまや百姓のジャック「フランス人」がジョン・ブルと対比されている。ロンドン・エコノミストのバリ通信員はそれについて

きわめておめでたくつぎのように述べている、「状況はたしかにパニックがおきるのを正当としているように見受けられたし、またフランス人は従来ごく小さなきっかけでもパニックにおち入る用意を極度にもっているのであるが、しかしパニックになる傾向はすこしも存在しない」と。フランスのブルジョアジーがその熱狂しやすい気質にもかかわらず、今日パニックのたんなる観念におびえてパニック状態になっていることは「既掲の『トリビュン』一八五七年十一月三十日号論説の末尾を見られたい」、パニックということが今回フランスにおいてなにを意味するかを、もっともよく確証している。だがパリのブルジョアジーのこの偽善的な態度「このようにパニックがくることを気づかっているといつた」は、ハンブルグの恐慌を割引くための組合 (Association for discounting the panic) と同様に効果をもたないだろう (ハンブルグの件についてはのちの註(8)を見られたい)。この前の日曜日の『オプザーバー』は、クレディ・モビリエについていやな噂さが流布されたので、みながその持株を値段を構わずに売ってしまおうと取引所に殺到した、と述べている。フランスの資本は——ペレール氏が彼において発見したコスモポリタンの性質にもかかわらず——、本来の商業では、つねにそうであったように、臆病で、けちで、かつ用心深くやっていた。「フランスでは」Schwindel は(これはもちろんまたそれとして、堅実な商工業の前提となったわけであるが)、がんらい、国家が直接または間接に実際の雇い主である部門でのみ、存在している。しかし、それ自体として(an sich)——ヘーゲルがいうであろうように——破産している資本家であっても、フランス政府の偉大さによって、私的資本家よりも多少長く生きのびうることはたしかだ。ブリオンの輸出にたいする警察の阻止——これは実際フランスでいまきわめて強く行なわれている——や、それよりもなお、新生産の小麦、絹、酒、等々の産物を価格に構わず輸出していることは、二、三週間、フランス銀行からのブリオンの流出を阻止している。だがそれにもかかわらず、流出ははじまるだろう。

われている。

(7) 前に見た『トリビュン』一八五七年十一月三十日号の論説、また『トリビュン』にそういうことを書いたとエンゲルスに告げている十一月十三日付の手紙でも、恐慌は普通ならずで二年前にやってきたはずだったということを述べていたが、『エコノミスト』もそういつているとして、ここにくり返し告げているわけである。なお本誌第十二巻第一号一一五〜六ページ、また第十三巻第三号一四四〜五ページ参照。なお、前掲のように(本誌第十一巻第三号八五〜六ページ)、一八五七年の銀行条例委員会でW・ニューマーチがこの『エコノミスト』がいつているというのと同じことを述べているが、この委員会は一八五七年秋の恐慌後同年十二月に設けられた銀行条例委員会とは別のものであって、すでに一八五七年七月三十日付で報告書、証言記録等が発表されていたはずであるから、上のことは『エコノミスト』を待たずとも——しかもマルクスの『トリビュン』十一月三十日号の論説以前に——この委員会で証言されていたことであつたわけである。

一八五七年十二月九日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「急いで恐慌に堪へてなお二、三の詳細をお知らせする。古い、きわめて賞讃されていた振替銀行がその固陋(Pedanterie)のために恐慌をいっそう極度に狂暴に悪化させてしまったハンブルグでは、つぎのようなことがおこつた。当地の Schunk (Schnucke-), Souchay & Co. がハンブルグ宛に手形を振出した(ハンブルグのA商会ないし銀行を支払人とし、ハンブルグのB商会を受取人とする手形)。まったく確実に事が運ぶように、同商会は手形支払人に——右の手形は商品等々のための手形ではあつたが——イングランド銀行宛の期限七日の手形(Bank of England seven Day Bills)を送つた。これ(イングランド銀行宛の手形)は反古同様だとして、受理されずに送り返された。この受理されなかったことは正当である。銀以外のものではもうなんの価値があろうか! Schunck, Souchay & Co. の裏書ならびにこのほか二つの同様に優良な商会の裏書のある期限二カ月の手形が、前週、一二パーセント以下では割引くことができなかった。——注意。僕は君に当該商会の名を挙げたが、もちろんこれはわれわれの間だけのことだ。内々の知らせをこんなふうに悪用していることが明るみ

に出たら、僕は窮地におち入らざるをえない。／リバプールやロンドンの製品販売商社はまもなく倒れるだろう。リバプールではぞつとする光景を呈している。連中はまったく無一文で、破産宣言をする気力すらほとんどないくらいだ。そこに月曜日にいた人の話によると、その取引所にいた人々は当地の人よりも三倍もしよげた顔付きをしているということだ。それはそうと、当地では雷雨がますますひどくやって来そうだ。紡績業者および工場主は、商品でえたかねを労賃や石炭にはたいてしまっているから、雷雨がはじまるやいなや、彼らは碎け散ってしまうにちがいない。昨日の市場はいままでどのときよりも意気消沈しており、不安であつた。／ある人の話では、ここ数日の結果として破滅におち入らざるをえないインド商社を五つないし六つ知っているとのことだ。／連中はいまになってはじめて、貨幣 *Schwindel* (*Geldschwindel*) は恐慌のさいもつともつまらないものだということに気がついている。そしてそれを悟れば悟るほど、ますますしよげた顔をしている。／……一包のガーディアンと一緒に送る。小さな地方記事に目を通したまえ、そのなかにきわめてすてきな事実がある」。

一八五七年十二月十一日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「不良債務や価格下落で相変らず非常に忙しい。

／この恐慌にあつては過剰生産はかつてなかったほど一般的であつて、それは植民地商品においても否定できず、また穀物においてもそうである。これはすばらしいことで、すごい結果を生じるにちがいない。過剰生産が工業だけにかぎられていた間は、話はまだ半分だった。だが過剰生産が農業をもとらえ、かつ温帯と同様に熱帯においてもとらえるやいなや、事態は大規模になる。／過剰生産を隠蔽している形態はつねに、多かれ少かれ信用の拡張であるが、こんどはまったく特別に空手形の使用 (*Wechselererei*) だった。銀行業者ないし『手形業務』を行なっている商会宛の為替手形 (*Traffen*) によってかねをつくり出し、そしてこの手形を満期前に補填する (*decken*)、あ

るいは取極めの次第いかんではそうしない（「ここは手形がまず振出され、それがおちる期日前に入金する、あるいはその前に当座貸越を受けうるようになれば、入金しない、ということであろう」）、というやり方は、「ヨーロッパ」大陸において、またイギリスの大陸商社において、一般に行なわれているところだ。当地の仲介商社はみなそうやっている。ハンブルグではこのやり方ははなだしく極端にまで行なわれていたのであって、そこでは一億マルク以上のバンク手形が流通している。だがそのほかにもおそろしいほど空手形が使用されていたのであって、Sieveking & Mann, Josling & Co. [E. Sieveking and Son, North of Europe trade. Evans : op. cit., p. 52] や Draper, Pietroni & Co. [前出]、およびその他のロンドンの商社がそのために破産した。彼らはこの路線において主として手形支払人であった。当地のイギリスの製造業や国内商業においては、事はこのようにして行なわれていたので、人々は一カ月で現金を支払うかわりに、三カ月満期で (nach Verfall 3 Monate dato) 自分宛に手形を振出させ、そして利子を支払っていた。これは絹製造業では、絹の価格が騰貴するのに比例して増加した。かんたんにいえば、各人が自分の力以上に仕事をした、つまり過度に取引したのだ。なるほど過度取引 (overtrading) は過剰生産と同意語ではないが、しかし事情は同じである。二千万ポンドの資本をもっているある商業社会 (mercantile community) は、それによってある一定量の生産能力、取引能力、および消費能力をもっている。彼らがこの資本を用いて空手形の使用によって商売——三千万ポンドの資本を前提とする——をするならば、彼らは生産を五〇パーセント増大させる。消費も繁栄によって増加するが、しかしけっしてこれと同じ割合ではゆかない。たとえば二五パーセントということにしよう。ある任意の期間の終りには (am Ende einer beliebigen Periode) 必然的に「繁栄時でさえ、真正の、すなわち平均的な需要より二五パーセント多い商品の蓄積が生じる。商業の文字板である貨幣市場がすでにあらかじめ恐慌を指し示してい

なくても、このことだけでも恐慌を爆発させるにちがいないであろう。だから崩壊をおこさせたら、この二五パーセントのほかに、なおすくなくともいっさいの必需品ストックの二五パーセントが売れないことになる。ひとは信用の拡張による過剰生産の発生ならびに過度取引を、現在の恐慌についてすこぶる詳細に研究することができる。事柄自体はあたらしいことではないが、しかし事柄が現在展開している形はいちじるしく明瞭な形なのだ。一八四七年や一八三七〜一八四二年にはけつしてこんなに明瞭ではなかった。／＼これがマンチェスターおよび木綿工業の現在のものと状況である。価格〔棉花の価格〕は、俗人どもにこれを健全な商売と呼ぶのを許すに十分なほど下がっている。だが生産がすこしでも増加すれば、リバプールに棉花はすこしもないのだから、棉花はすぐに高くなる。だから、たとえ注文があったとしても、短縮した労働時間で操業することをつづけざるをえない。いま注文はあるにはあるのだが、しかし恐慌の強さをまだ感じていない地からだ。そして仲介業者はそのことを知っており、だから買わない。……／＼市場は今日ふたたび下げている。一四ペンスないし一四ペンス半であった糸が一ペンス半を唱えられ、そして一〇ペンス^{3/4}とつけて手に入れた者もある。インド人は市場に来ていない。ギリシャ人は小麦を抱えてにっちもさっちもゆかないでいる、——彼らはそれでほとんどいっさいをやっているのであり、彼らの主たる帰り荷（ガラツおよびオデッサからの）なのだ。ドイツ人はさつき挙げたような理由から買えないでいる。国内取引商社は自分たちのバイヤーにすこしでも買付けをすることを禁じている。アメリカは問題にならない。イタリア人はその粗生産物すべての下落に悩んでいる。あと四週間、そうすると騒動は当地で非常にひどくなるだろう（Noch vier Wochen, und der Tanz wird hier sehr arg）。小さな紡績業者や工場主は毎日倒産している。／＼ハンブルグの Mercks は一千五百万〔マルク〕の政府前貸によってわずかに保っているにすぎない……／＼……今日は君のフランス云々に

かんする手紙について述べる時間がない。それはあまりに多くの熟慮を必要とする」。

(8) ハンブルクでは前記のように手形がまったくだめとなつてしまつた。この事態を救うために、十一月二十三日に一千万バンコ・マルクの資本金をもつて手形に保証を与える割引保証組合がつくられたが、しかしこれは三日後にはその資金を使い果たしてしまつた。十一月二十七日に国債供与による信用供与の策が採られたが、これもその国債が割引できない状態となつてしまい、最後に外債——オーストリア政府の——の援助を受けて政府の割引金庫が設けられ、大商社会社にたいする貸付が行なわれることとなつた。—— Rosenberg : a. a. O., S. 129~30, "Report", No. 56, op. cit., p. 82~3. 「十二月十二日に、政府の援助によつて主要な商社はその債務を履行するはずだということが知れわたるやいなや、バニックはやんだ。貨幣はただちに豊富となり、約二週間のうちに最良手形にたいする割引率は二ないし三パーセントに低落した」 ("Report", No. 56, op. cit., p. 83)。

一八五七年十二月十七日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「恐慌は僕をひどく奔命に疲らせている。毎日価格がより低くなつており、そのうえ恐慌がわれわれにより近く肉薄してきているのだ。…… / マンチエスターはますます深くはまり込んでいる。市場にたいして不断の圧迫がまったくはなはだしくはたらいっている。だれも売ることができない。毎日より低い値がつけられており、すこしでも躊躇している者は、自分の商品をぜんぜん提供することができない。紡績業者や工場主の間ではひどいありさまだ。糸代理商はだれ一人、現金または担保付でなければ、もはや工場に紡織のための糸を売らない。個々の小さな業者はすでに倒れたが、しかしそんなことはまだまったくなくていいのだ。 / Mercks は、当地の店もハンブルグの店も、二回にわたつて強力な救済金を受けたにかかわらず、まったくにっちもさっちもならないでいる。同商会はここ数日中に倒産すると予想されている。なにか特別な事でもおこらないかぎり、助かることはできない。ハンブルグの同商会は、四百万ないし五百万マルク・バンコの資本

にたいして二千二百万マルク・バンコの負債をもっているという噂さだ(一三マルク＝一ポンド)。別の噂さでは、恐慌によってこの資本はすでに六十万マルクにへってしまっているとのことだ(このあと同商会についてエンゲルスはなにも書いていないが、Evansの書所載の破産EstateのリストのなかにはMercksの名は見られない)。／われわれは四つの異なった恐慌を手に入れている。1、植民地商品、2、穀物、3、紡績業者および工場主、4、国内商業、——この最後のものは早くても春になってからだ(前掲十一月十五日付のエンゲルスの手紙参照)。羊毛地域では現在すではじまっております、しかもまったくみごとだ。／破産者たちの貸借対照表を記録するのを忘れないように、——Bennoch, Twentyman [& Rigg. 前出]、ダービーのReed [前出、これもEvansの書所載の破産Estateのリストにはない]、Hoare, Buxton and Co. [North of Europe trade. — Evans : op. cit., p. 52] どれもみなきわめて気を引立てる。／フランスにかんする君の見解(前掲十二月八日付のマルクスの手紙参照)はその後ほとんど文字どおり新聞によって証明された。そこでの崩壊は確実であり、そしてはじめて中部および北部ドイツのSchwindlerを困らせることになるだろう。／Macdonald, Monteith, Stevens (London and Exchange Bank) につづいての審議を記録してしまするか? London and Exchange Bank ……は僕がいままで読んだなかで一番大規模だ。⁽⁶⁾／北部ドイツはハンブルグを除けば、まだほとんどまったく恐慌に引込まれていなかった(前掲十一月十五日付エンゲルスの手紙参照)。だが、いまやここでもまたはじまっている。エルベルフェルトではHeimendahl (絹二重織業者であり取扱業者であるところの)、バルメンではLinde & Trappenberg (小間物製造業者)が破産した。二つとも堅実な商社だった。北ドイツ人はそのかぎりでは、ほんのすこしであっても損失を蒙ったわけだ。かの地では、ことと同様に、貨幣市場が一時的に破壊されたことが、諸商品の長い間にわたる販売不能ほどにはひどい作用を及ぼしていないのだ。／ウ

イーンも順番に当っている。／＼ループスはいま譲歩して引下がっている、われわれが正しかったのだ〔前掲十二月八日付のマルクスの手紙参照〕。／＼プロレタリアートの間の苦悩もはじまっている。目下のところまだあまり革命的なもの認められない。長い繁栄がはなはだしく士気を沮喪させたのだ。街頭での失業者たちはいままでのところなお、物乞いをしたりぶらぶら歩いたりしている。追いはぎ強盗がふえている、だがひどいというほどではない。／＼僕はいま、恐慌を追いかけるために人々の間を大いに走り廻らねばならないので、デーナのための『トリビュン』のための仕事をやる時間がほんのすこししかない。……／＼マンチエスターの市況はいつも土曜日および水曜日のガーデイアンにのっている。今日まとまった一束を君に送る。また今日のなかには一つの労働者統計がふたたびのっている。／＼銀行条例にかんする予告、おめでとう〔前掲十二月八日付のマルクスの手紙、および本誌第十三巻第三号二五〇～二五二頁参照〕」。

(9) Macdonald および Monteith 両商会はスコットランドの大きなモスリン布商会であつて、Wallace および Pattison 両商会とともに、既述の一八五七年十一月九日に支払停止におち入った Western Bank of Scotland の大口取引先で、同行を直接に破綻させた原因となつた商会であつた。この手紙が書かれた頃、整理によつて内状が――空手形操作を大々的に行なつていた――暴露されたのであらう。のちにマルクスは『トリビュン』一八五八年十月四日号論説――本誌第十二巻第一号一三三～四ページの註(11)参照――のなかで、議事委員会が調べた一八五七年恐慌のさいに露呈された銀行の経営紊乱について記しているところ、この Western Bank of Scotland ならびにこれら商会を紊乱の見本として掲げている(大月選集訳、第九巻、七四～六ページ)なお Evans ; op. cit., p. 50, p. 76～7 (“Report”, No. 47) 参照。また J. R. T. Hughes ; Fluctuations in Trade, Industry, and Finance, a Study of British Economic Development 1850～1860, Oxford, 1960, Appendix 6, p. 333～5 にこの Western Bank およびこれら商会についてのややくわしい記述がある。

この Stevens という名は右の諸記述には出ていないが、Macdonald などの商会は手形を振出し、これをロンドンで引受けつもらう、それを Western Bank で割引に付してゐたとされているから、このロンドンで手形の引受けをしていた業者ではな

いかと思われる。ロンドンの個人銀行業者のなかに Stevenson, Salt & Sons とぶうのがあるが (Thomas : op. cit., p. 649) おそらくこれのことであろう。また London and Exchange Bank というのはエンゲルスが一寸つけてみた名ではないかと思われる。なおエンゲルスは *Die London and Exchange Bank mit den borrowed notes, die als security figurieren, sind das Größartigste, das ich je gelesen habe. & 書くところだ' の mit den figurieren とぶうのは、さういふ意味が遺憾ながらわからない。*

110

一八五七年十二月十八日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「僕はまったくものすごく仕事をしている、大てい朝の四時まで。仕事はすなわち二つある。第一、経済学概要の仕上げ……/第二、現在の恐慌。これについては『トリビュン』の論説を別とすれば——⁽¹⁰⁾ただ帳付けをしているだけだが、しかしこれがなかなか時間をとる。ドイツの公衆の間に、われわれがもとどおり健在であり、いまでも変っていないことを再公示するものとして、春ごろ一緒にこの件についてのパンフレットを作ってみたらどうかと考えている。僕は大きな三巻を計画している、——イギリス、ドイツ、フランス。アメリカについての件は『トリビュン』にいいさいの材料がある。人はそれをあとで編集することができると。それはそうと、できたら『ガーディアン』を毎日送ってくれるとありがたいのだが。一度に一週間分かそこらを後に受取らねばならぬのだと、仕事が二重になり、かつとどこおることがある。/フランスでは、(商業面で)『ドイツ人』が——一般にいま彼らを注意しはじめねばならない——、とくにアーヴルで、おそらく騒動(バニック騒動)をはじめたろう。そのうえ、——破産国家の一般的腐朽は別として——商業自体が、マルセイユやボルドー、その他きたないやな奴 (lausige Kröten, フランス人をこう呼んでいるわけである) が外国の要素の混入

介入によって鞭達されてそのけちなきたない吝嗇と臆病とをこえていたところではどこでも、とくに腐敗している観を呈している。根本的にいって、このように動きのない (immobil) 土地柄においてまさに、クレディ・モビリエ (mobilier) のようなものが可能でありかつ必要だったのだ。この『国民の救世主』について知れば知るほど、君はこれが嫌いになるだろう。——君もあとになればどうしたって、恐慌の非常に大切な『スキャンダルの記録』を忘れてしまうから、時間の許すたびに、僕に書き送ってくれないか。僕は君の手紙から抜き出して、それを台帳に記入する。」

(10) まえに記しておいたように、マルクスは前掲の一八五七年十一月三十日号論説(十一月十三日執筆)のあと、このころ、十二月十五日号、二十二日号、一八五八年一月五日号、十二日号、などに恐慌についての論説を書いていた。

一八五七年十二月二十五日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「フランスの状態を明らかに知ることがいまわれわれの第一の仕事だから、フランスの商業、工業、および恐慌にかんする僕の抜き書き全部を読み返してみたが、そこで二、三の結論に達した。それをかんとんに君にお知らせしよう」。そしてこのあとマルクスはフランスの状態についてややくわしく述べている。さきに記しておいたように、一八五七年秋の恐慌勃発前、マルクスはフランスの情勢にとくに注意を払い、クレディ・モビリエが破綻して、フランスの金融恐慌が一八四八年のような動乱に発展してゆくことを期待していたのであったが、このようにフランスの情勢に気をとられていたとき、いわば横から不意に九月にアメリカで恐慌が勃発し、それがただちにイギリスに反響して、イングランド銀行条例の停止にまでいたる恐慌になったわけであった。しかもその後の経過において、フランスでは事態があまり進展してゆかなかつた。マルクスがここでフランスを問題としているのはこういういきさつによるものであった、と推測される。ところで、前記のよ

うに（本誌第十二卷第二号四五～六ページ参照）『トリビュン』一八五八年一月十二日号掲載のものとして「フランスの商業恐慌」なる論説があるが（大月選集訳、第九卷、四九～五六ページ）、この十二月二十五日付エンゲルス宛の手紙で述べていることは、いくつかの点でまたこの論説で述べられている。ここでフランスの情勢についてすこし根本的な考察を試み——これまでマルクスはフランスについて前掲のように十二月八日付の手紙、すぐ右の十二月十八日付の手紙などでエンゲルスに書き送っていたが——、それをエンゲルスにこの手紙で書き送るとともに、また『トリビュン』への論説として書いてみたのであろう。そこで——本稿の主題としているイギリスではなくフランスのことであるが——いまこの手紙を掲げながら、併せてこの論説を同時に見てゆくこととしよう（以下の傍点―三宅）。

論説ではまずはじめにつきのように述べている、——「フランス銀行の割引歩合は、十一月十二日に採用された一〇パーセント（本誌第十三卷第三号一三六ページ参照）から十一月二十六日には九パーセントへ、十二月五日には八パーセントへ、十二月十七日には六パーセントへとひきつづきひき下げられているが、帝政派の新聞雑誌はもちろんこのことを、商業恐慌がすぎ去ったこと、『フランスはきびしい試練をたいした破局もなしにとおり抜けた』ことの、確乎たる証拠として利用した。彼らのいい分によると、ナポレオン三世の財政制度は『あらゆる他の国民に抜んでたフランスの明白な商業的優越性』をつくり出し、それによって、フランスが今日でも将来でも『フランスと競争している国よりも恐慌の打撃を受けることがすくないだろう』ような状態をフランスに保証したというのである。……しかしかりにフランス銀行が、たとえ四パーセントまでその割引歩合を下げつづけたとしても、いったいそれはなにを意味するだろうか？ 一八四七年十二月二十七日には割引歩合は四パーセントまで引下げられたが、そのときはまだ一般的恐慌がつづいており、フランスの恐慌はまだその極点に達していなかった。こんにちと同様にそのときもフランス政

府は、フランスが幸いにも一般的恐慌を免かれ、ほんのかすり傷を、しかも表面にすこしばかりただけで逃げ終わせたといって、国をあげて祝ったものである。ところが二カ月後には、金融上の嵐がそこに居並ぶ賢者もろとも王位を吹き飛ばしてしまった。マルクスはこのように、フランス銀行はそのレートを下げてきているが、しかしそのことはまだけっして、フランスでの恐慌がたいしたこともなくその頂点をこえてしまったということを保証するものではないと前置きし、そして「われわれはもちろん、恐慌が予期したほどフランス商業をばげしく揺すぶらなかったことを否認しようとは思わない。その原因はまことにかんたんである」として、つぎのようなことを指摘している、

——「すなわち、こんにちもそうであるが、以前も長いこと、フランスはアメリカ合衆国、イギリス、およびハンザ同盟諸都市との貿易で受取勘定にあった。そこで右の諸国を襲った恐慌が直接にフランスに反響をおこすようなことになるには、これら諸国に多額のクレディットを与えているか、それともこれら諸国向けの輸出にあてられた商品や投機的に多量堆積しているかしなければならなかった。だがそのようなことはすこしも行なわれていなかった。そのため、アメリカ、イギリス、ハンザ同盟諸都市の諸事件がフランスからの金流出をひきおこすようなことはありえなかったのである。そしてフランス銀行が数週間のあいだその割引歩合をイングランド銀行の水準まで引上げたとしても、それはフランスの資本が外国により有利な投資先を求めはじめはしないかという懸念から行なわれたにすぎない。けれども、一般的恐慌はその現在の局面においてさえ、フランスとアメリカ合衆国、イギリス、およびハンザ同盟諸都市との貿易関係に照応した形で、すなわち慢性的沈滞という形で、フランスに反映したことを否定することはできない」。

ついでマルクスはこの「慢性的沈滞」について、ボナパルトもその公式信書のなかで「フランス貿易の慎重さと政府の警戒にもかかわらず、商業恐慌は、多くの工業部門の生産を停止しないまでも、ともかくその生産を縮小する

か、あるいは貨銀を切下げなければならぬとした」という意味のことを書いているとし、「多くの工業家はアメリカとイギリスでの破産の結果莫大な損害を受け、パリ、リオン、ミュールーズ、ルベール、ルーアン、リール、ナント、サン・ティエンヌその他の工業中心地では、生産が破滅的に縮小された。それと同時にマルセイユ、ル・アーヴル、ボルドーでも深刻な困難が感じられている」、「全国にわたる商業の一般的不振は最近のフランス銀行の月例報告にはっきり反映されている」が、これは十二月の銀行券流通高、手形割引高がともに十一月に比し、また十月にくらべればさらに一そう、減少していることに示されている、「フランスの新聞の現状では、もちろん、地方諸都市におこった破産の性質を正確に解明することはできないが、しかしパリでは、破産はたとえいまのところは疑いもなくそれほど深刻ではないにせよ、やはり企業の数の中でも増大の傾向を示している」云々といったことを挙げてゐる。

これにたいし手紙の方では、さきのように「二、三の結論に達した。それをかんとんに君にお知らせしよう」として、1、2、3、4、5、6、と記しているが、この1、2、3のところではつぎのように述べている。

「(1)、イギリス、北欧、およびアメリカの恐慌は、フランスにおいてけつして直接的に『フランスの恐慌』をひきおこしていないのであって、ただマイナスの作用——慢性的窮境、生産制限、貿易停滞、および一般的不安——をもたらしにしているにすぎない。その原因、——フランスの貿易収支が合衆国、ハンザ諸都市、イギリス、デンマークにたいして順であることである。スウェーデンおよびノールウェーにたいしては逆になっているが、それはハンブルグによって相殺されておつりがくる。その結果、これらの恐慌はフランスにおいてけつしてブリオンの流出を生ぜしめえなく、したがってけつして本来の意味でのいわゆる貨幣恐慌を生ぜしめえないのである (Consequently können diese Krisen nie einen drain of bullion, also keinen properly socalled monetary panic in Frankreich produzieren) 。

ten)。それにもかかわらずこんど行なったようにフランス銀行が利子歩合を引上げるならば、それはただ資本家たちがその貨幣をより有利にこれらの国に投資するのを阻止するためになされているにすぎない。だがブリオンの輸出が貿易収支の必然的な結果ではなく、利得に浮き身をやつす連中の利慾の必然的な結果にすぎないかぎりでは、それは、ボナパルトがいままたも成功をおさめているように、憲兵によってよく阻止することができる。有利な貿易収支をもつこの国が、長期の信用をなんらか与えているとか、また恐慌中心地への輸出品を堆積しているといったことがなかったなら——しかもこうしたことは二つともフランスの製造業者や商人の行商人的 (pedlarnäßig) 性質に相反することだ——、「これらの他の国々の恐慌によって」損失を受けたり、等々することはやむをえないだろうが、しかしけつして急性の恐慌 (akute Krisis) には見舞われないだろう。フランスは一般的恐慌 (general crisis) の最初の局面 (phase) において幸運にも免れたごとき仮象をえているが、ルイ・フィリップもまたかかる仮象に欺かれたのであった。二月革命前の議会開会の辞のなかで、彼はこうした特典をもつ『よきフランス』を祝賀したのであった。

／(2)、以上のことは認めることとして、恐慌の最初の局面はすでにフランスの商工業のうえに、以前の類似したはずれの場合よりも悪い作用を及ぼしている。／(3)、フランスにおける恐慌の最初の作用は、——フランス人の性質にふさわしく——支出および事業のきわめて臆病な縮小であった。それゆえ、流通高とフランス銀行での割引高とのはなはだしい減少が生じ「これは mit enormem Fall der Zirkulation in den Bank discounts となつてゐるが、これは mit enormem Fall der Zirkulation und den Bank discounts を『往復書簡集』編集者が読み誤つたのではなからうかと考えられる。原文どおりでは意味が通じない」、これと同時にフランス銀行に金が集積した。したがって——恐慌はいつも秋にやってくるという事情、ならびに、どのフランス政府も、勘定の決済のさいに利子歩合が高いばあいには、年末に政治的不

安を心配するという事情が結びついて——十二月に利子歩合の引下げが行われた。ルイ・フィリップは一八四七年十二月に「フランス」銀行にたいして利子歩合を四パーセントに引下げさせた」。

また手紙の4、5、6のところではつづいてつぎのように述べている、「(4)、資本の商工業での遊離は、同時に取引所に活気増大をもたらしている。Boustrapa (ルイ・ボナバルトのことであろう)のもとでは、このことはルイ・フィリップのもとでよりもおおいっそう生じている。なぜなら、彼は一八五二年の布告によって「フランス」銀行にたいして、鉄道株および鉄道社債 (railway securities und fonds) ならびにクレディ・フォンシエ証券 (Credit foncierpapiers, [Crédit Foncier は一八五二年にクレディ・モビリエと相前後して設立された不動産抵当銀行であって、フランス銀行、クレディ・モビリエ、クレディ・フォンシエが当時フランスでの三つの大きな銀行をなしていた]) を担保に前貸すること、またコントワール・ナシヨナル・デスコント (Comptoir national d'Escompte) ⁽¹¹⁾ によって割引かれた Schwindel 手形を再割引したり、同じく同行「コントワール・ナシヨナル」が担保にとって前貸したその有価証券をふたたび担保にとつて同行に前貸することを、強制しているからである。それゆえたとえば、フランスの鉄道株および鉄道社債 (railwayshares and bonds) は、フランスの鉄道の収入がイギリスのそれよりも比較にならぬほど減少しているにもかかわらず、高い相場を保っている。たとえば、オルレアン「鉄道」の収入は十月二十九日から十一月二十六日まで二四パーセント減少し、そしてそれ以後もっと減少しているが、それにもかかわらず、オルレアンの相場は、十月二十九日に二九八五「フラン」であったのが、十二月二十二日に一三五五「フラン」であった(これでは「高い相場を保っている」ことにはならない。「二九八五」の方がまちがいであろう。なお註(12)の『トリビュン』論説の方での記述を見られたい)。同様に、フランス銀行の十二月の月例報告を見ると、十二月の割引高は十月に比し九四、二三六、五二〇フラ

ン、十一月に比し四九、九五五、五〇〇フラン 減少しているのに、鉄道株 (railway securities) への前貸は増大していることがわかる⁽¹²⁾。

(11) コントワール・ナシヨナル (Comptoir National d'Escompte de Paris) は、後年、クレディ・リヨネ (Crédit Lyonnais) ソシエテ・ジェネラル (Société Générale) とともにフランスの預金銀行中の三大銀行といわれた銀行であるが、後の二行がそれぞれ一八六三年、一八六四年と一八六〇年代に設立されたものであるのにたいし——なおクレディ・モビリエは一八六七年に破綻した——、これはより古く、一八四八年革命ののちに、フランス銀行と一般商工業者との中間に立つて商業手形に第三署名を与えて割引可能性をつける銀行として、半官半民の形で設立された Comptoir d'Escompte が、一八五三年に改組されてこの名称をとることになった銀行である。マルクスはこの一八五七年十二月二十五日付の手紙のおわりに同行についての若干の追伸をつけ加えているので、ここに掲げておこう。「コントワール・ナシヨナル・デスコント・ド・パリについてはさらにつぎのこととが注意さるべきである。同行は臨時政府によって、二つの署名しかなくかつそのままでは価値の低い質の手形を割引可能なものとするために設立された銀行であるが、一八五一年に——クーデターのすぐ二、三日後に——フランス公債、株式会社組織の産業会社および金融機関の株式ならびに社債を担保として前貸を与える権能を、Boustrapa (ルイ・ボナパルト) から与えられた。これら証券を担保とする貸付は、一八五四—一八五五年には九四〇千ポンド・スターリング、一八五五—一八五六年には一、五〇〇千ポンド・スターリングにのぼった。そのうえ同行は一八五一年に、一つの『鉄道支所 (Sous Comptoir des Chemins de fer)』——それは鉄道株および鉄道債を担保とする貸付を唯一の業務とするものだ——を設立する権利をえた。この前貸は一八五二年六月末に五二〇千ポンド・スターリング、一八五二年末には一、二四〇千ポンド、一八五二—一八五三年には三、六〇〇千ポンド、一八五四年には四、五六〇千ポンド、つまり一八五一年「六月末」の前貸の約九倍となった。これはまったく、スコットランドの諸手形銀行 (Scotch Exchange Banks) が一八四六—一八四七年にそのために破滅したのと同じ、すてきな営業だ」。

(12) 上の(4)とだいたい同じことが上掲『トリビュン』論説ではつぎのように書かれている、「フランスの商工業の縮小は、その当然の結果として貨幣を取引所の意のままにさせた。いわんやフランス銀行が国庫証券と鉄道株を担保として貸出をしなければならなかったから、なおさらである。現在フランスの商工業の不振は、有価証券の投機を抑制するどころか、それを助長しさえし

ている。このようにして、フランス銀行の最近の月例報告に見るように、鉄道株を担保とするその貸出は、割引や貨幣流通高の減少と平行して増加している。そのために、多数のフランス鉄道収入が激減しているにもかかわらず、その株式相場は昂騰している。たとえば、オルレアン線の収入は十一月末に前年同期とくらべて二二・五パーセント減少したが、その株式は、十月二十三日にはやっと一、三〇〇フランという相場であつたのにたいし、十二月二十二日には一、三五五フランという相場をだしたのである」。

「(5) 本来のフランス恐慌 (*die eigentlich französische Krisis*) は、一般的恐慌がオランダ、ベルギー、関税同盟、イタリー (トリエストを含む)、近東、およびロシア (オデッサ) においてある一定の程度に達するとき、はじめて勃発する。というのは、これらの諸国にたいしては貿易収支がいちじるしくフランスが逆になっており、したがって逼迫はフランスに直接に貨幣バニックを生ぜしめることになる。それがかくしてフランスでおきるやいなや、真に驚嘆に値する仕方での国々に反作用する。フランスはスイスにたいして、合衆国がイギリスにたいするのと同じの關係に立っている。一時的な貿易収支はつねにフランスに順である。しかしフランスはスイスにきわめて多くの負債を負っているで、スイスはつねに、恐慌の時期にその負債にたいしてはげしく支払を求めることが可能である」⁽¹³⁾。

(13) 上掲『トリビュン』の論説ではさきに本文に掲げた記述につづいて、この点をつぎのように書いている、「しかし、アメリカ合衆国、イギリス、およびハンザ同盟諸都市とのフランスの貿易關係ではフランスの受取勘定となつてゐるとしても、南ロシア、ドイツ関税局(関税同盟?)、オランダ、ベルギー、近東、およびイタリーとの貿易では、収支はフランスにとって不利である。スイスについていえば、同国は現在はずねに支払超過となつてゐる。しかしフランスはそれと同程度にスイスの債務者である。というのは、アルサス地方の多くの工場はスイスの資本で動いており、したがって金融逼迫の時期にはスイスはいつでもフランスの金融市場に強い圧力を加えうるからである。以前もそうであつたが、現在も、上記の諸国で商業不振がある程度のはげ

しさに達しないかぎり、フランスにはげしい恐慌はやってこないであろう」。そしてこれにつづいて、このオランダ、ドイツ関税同盟、黒海および近東、イタリアにおいてそれぞれ恐慌が到来しそうな、ないしすでにおこっている状況にあることをしている。論説はこれにつづいて、「外国側からの重圧が強まった結果フランスに恐慌が成熟したとき、その恐慌は、本当の商業冒險家とはいわないまでも投機家の面々と政府とをおびやかした〔ここは前のつづきから見ても、おびやかすであろう、というところであろう。誤訳?〕。フランスでは政府は、アメリカやイギリスやハンブルグで個人商業が演じるような役割を演じている。恐慌はあらゆる重みをかけて株式市場にのしかかり、その重要な支柱——国家そのもの——に危険をおいかぶせた〔ここも未来形のはず〕とし、このあとに前掲註(12)に掲げた記述がつづき、そのつぎが論説の最後のバラグラフとなっている。

「(6)、本来のフランスの恐慌が勃発すると、そのとき証券市場に、そしてこの市場の保証に、すなわち国家に、大へんなことがおきる(このことは、目下までもきわめてはでな仕方で外国証券で賭博をしているイギリスにも反作用をもたらすだろう)。ハンブルグやイギリスや合衆国で私的資本家が行っている *Schwindel* を、フランスでは国家自身が行っており、またフランスの行商人たち〔前出のようにマルクスはフランスの製造業者や商人はかかる性質があるとしていた〕はみな取引所での賭博者だった。すでにイギリス、アメリカの恐慌の反作用によって、鉄道が停頓状態になった。ボナパルト氏はそこでなにをしたか? 彼は「フランス」銀行を強要して、事実上の鉄道請負人にならせ、そして連中にたいして鉄道債を担保に——彼らは一八五六年十一月三十日の取極めによってこれを発行する権利を与えられている——貸付をさせた。これらの債券は一八五八年中に約九百万ポンド・スターリング発行されることになっている。十二月三日にすでに耳まで泥にはまったクレディ・モビリエは、クレディ・フォンシエおよびコントワール・ナショナル・デスコントと合併する準備をもっている。なぜか? という、この二行は彼らのもっている有価証券を担保として「フランス」銀行から前貸を受けたり、また彼らの割引いた手形を再割引してもらったりする権利を、法

律によって与えられているからである。だから *Boustrapa* の計画は明らかに、フランス銀行をして、すなわち自分が所有しているのではなく自分にただ預託されているにすぎない資本——これは隣接の国々において最初の信号が与えられるとともに流出することになるだろう——をもつフランス銀行をして、彼「ルイ・ボナパルト」の全 *Schwin-delejan* の総支配人たらしめることにある。これはじっさい、同行をも破産させるのに大へんよい。ところでボナパルト氏でも思いつくことができなかったことは、株主の払込金をフランス銀行から払わせることである。この払込金は一八五八年には、一八五六年十一月三十日の取極めによってフランスの鉄道だけで一千万ポンド・スターリングである。いっさいの *Schwindel* 会社について見ると、すくなくとも三千万ポンドにのぼる。……フランス人たちは、こうした払込金を払込むことはまったくできないだろう。加うるに、フランスの証券の大きな所有者であるドイツ人、オランダ人、スイス人は、それら証券を、最初の重大な驚鐘のさいに——フランスにおいてのそれであろうと、本国での逼迫であろうと——価格構わずにバリの取引所で売り払うだろう。かくして *Boustrapa* は一八五八年にはかなり長い期間戒厳状態とアッシニア「不換紙幣」によって持ちこたえるのでなければ、免れることはむずかしいように見受けられる。古いいっさいのものは駄目になってしまい、そしてイギリスその他の証券市場がとっていたいままでのばかばかしい、常規を逸した活況は、やはり悲劇で幕を閉じるだろう」。

(14) 上掲の『トリビュン』論説の最後のパラグラフは、この手紙の(6)とほぼまったく同じことが述べられている。

一八五七年十二月三十一日付エンゲルスからマルクスへの手紙。「フランスにかんしては君は、僕の判断しうるかぎり、どの個々の点においても正しい。かの地においても、経過はいままでのところノーマルだ。当地の国内商業では

事がいまはじまっている。マンチェスターの仕事をしている二つのロンドンの商社がこの部類に属している。だがこれはやっとはじまりである。この種のことは、不況(Druck)が八カ月から十二カ月つづいたときはじめて、いちじるしくやってくるのできるのだ。僕には恐慌全体の経過が——こんどの恐慌のすばらしい一般性と包括的な性質とを別とすれば——他のどのそれよりも一八三七―一八四二年の恐慌によりつながりがあるように思われる。目下のところ当地の人々は、最初の局面、すなわち貨幣恐慌とその直接的な諸結果とがすぎ去ったことから、恐慌はすぎ去った(the crisis is over)と信じてみずからをだましている。なにしろ根本においてはいまもってどの個々のブルジョアも、彼の特殊の営業部門は、そしてとくに彼自身の営業は、完全に健全だったと信じているのだ。しかも彼らは比較するのに Monteth [前出] とか Mac Donald [前出] 等々といったような非常にすばらしい模範的 Schwindler をもっているのだ、自分はきわめて品行方正だと当然思えてくるわけだ。……「やや小康をえているところの」この状態は長くはつづかないだろう。さし当り僕はこんなふうに思う、——当地では弱い上がり下がりがあり、全体としては下向してゆく傾向を辿る。すこしは上向することもおそらくあるだろうが、そのことはあたらしい稲妻がどこかに落ちるまでは正確にはいえない、と。いずれにしても、紡績業者と工場主にとっては、すでに需要の欠乏および供給の過剰があるから、悪い年が来る。停滞した不況(stagnierender Druck)、これが当地のブルジョアにとってもっともおそろしいことなのだ。信用はすべて極端に短期だから(二週間から六週間まで)、貨幣恐慌は当地では大したことはできない(Geldkrisen machen hier nicht viel)。——さて騒動の年(Krawalljahr)一八五八年にたいして、家族のみなさんに新年のおめでとうを申上げる」。

これで一六からつづけてきた一八五七年におけるマルクス、エンゲルス兩人の記述を見ることが終わったわけである

が、一八五七年十一月十二日に銀行条例が停止されたイングランド銀行は、前の一八四七年恐慌のさいとちがつて——またのちの一八六六年恐慌のさいともちがつて——、条例によって制限されていた限度をこえた銀行券発行を現実にこなうこととなり、十一月一杯発券高はこの限度をこえていた。⁽¹⁵⁾だが十二月には超過せず、そして十二月二十四日にはバンク・レートが一〇パーセントから八パーセントに引下げられた。⁽¹⁶⁾このかぎりにおいて、——エンゲルスは右の手紙で人々は誤って「恐慌はすぎ去った」と信じていると書いているが——すくなくともバニックはすぎ去ったわけであった。そしてこのあと、バンク・レートは一八五八年に入るとともに一月七日に六パーセントに、同十四日に五パーセントに、同二十八日に四パーセントにと相ついで引下げられ、さらに二月四日には三パーセント $\frac{1}{2}$ 、十一日には三パーセントと、ここ数年来の低さに下がっていった。だが、このように貨幣市場の回復は急速に進んでいったが、商工業の困難はなおしばらくつづいた、——「一八五八年の二月から六月の間、商業界を観察していた者の一般に認めるところでは、ビジネスの回復はただ緩慢に生じているにすぎず、コンフィデンスの欠如はきわめて明らかであった」(Evans, op. cit., p. 43)。しかしいづれにしても、このあと一八五八年にはよりはげしい事態はおこらず、そして夏すぎには、のちに見るように、景気ははっきりと上向を辿ることとなった。

(15) 既述のようにイングランド銀行条例によって金属準備をこえる銀行券発行は当時一四、四七五千ポンドに制限されていたが、条例停止とともに、この限度をこえて二、〇〇〇千ポンドの銀行券が発券部で発行されて、銀行部の手に渡された。そして実際に、十一月十三日から三十日までの十八日間、銀行券の流通はつぎのように法定の限度をこえた。——十一月十三日(金)一八六千ポンド、十四日(土)六二二千ポンド、そしてつぎの週一杯は八、九十万ポンドをこえたが、第三週目には減少してゆき、第四週目の水曜日十一月三十日には一五千ポンドに下がった(“Report”, No. 26, op. cit., p. 67)。

(16) 議会の承認をえたイングランド銀行条例の停止期間は一八五八年二月一日までとなっていたが、これには理事会が割引レ

トを一〇パーセント以下に下げないばあいという条件がついていたのであつて、したがつて十二月二十四日に八パーセントに引下げたことによつて、ここで銀行条例はふたたびその効力を復活することとなつた(MacLeod : op. cit., vol. II, p. 155)。

(本稿は昭和三十四年度文部省科学研究費交付金(総合研究)による研究成果の一部である。)